

# 考古学の先駆者としての吉田雀巢庵

## —『尾張名古屋博物会目録』を通して

鬼束 芽依

### 1 はじめに

日本における考古学の始まりは、一般的にE・S・モース<sup>(1)</sup>による大森貝塚の発掘だとされ、「近代科学としての日本考古学の出発にふさわしい」(大塚・戸沢・佐原編『日本考古学を学ぶ(1)』1988 有斐閣:57頁)とされている。しかし、国学や本草学が盛行していた時代には、趣味や研究の1つとして石器や勾玉などの古器物を集め、研究・考察結果を論文として書き遺した人物が多数存在していた。そのような人物たちは、現代において考古学の先駆者として評価されており、研究も多くなされている<sup>(2)</sup>。江戸時代に考古学が学問的に成熟したわけではないが、学問の隆興と好古思想の流行から多くの学者が古い事柄を考える取り組みを行い、それらの人々はしばしば「好古家」と呼称される。具体的な好古家の例を挙げると、福岡藩の好古家として有名なのが青柳種信である<sup>(3)</sup>。彼の考古学的業績としてもっともよく知られているのがその著作『柳園古器略考』である。これは、1822(文政5)年に怡土郡三雲村<sup>(4)</sup>で偶然発見された、甕棺と同時に出土した銅剣・銅戈・鏡・銅矛・勾玉・管玉・ガラス璧について記録・考証したもので、その図版の正確さ<sup>(5)</sup>や考証の精緻さで高く評価されている。

そのような人物たちに個人的に興味を持ち、好古家として著名な伊藤圭介と彼が所属していた本草家グループ・嘗百社<sup>しょうひゃくしゃ</sup>の活動を調べていた際、メンバーの1人である吉田雀巢庵<sup>じゃくそうあん</sup>(以下雀巢庵とする)の活動に興味を持った。彼が主催し自宅で行っていた博物会には石器や古器物の出品が多い(磯野2001)という情報を手に入れ、幸いにも国立国会図

書館デジタルコレクション(<http://dl.ndl.go.jp/>)でその博物会の目録を閲覧することができた。雀巢庵は『虫譜』『貝譜』『魚譜』などの自然科学分野に関する名著を遺したことで名高いが、本稿では『尾張名古屋博物会目録』という史料を通して、雀巢庵を考古学の先駆者として再評価したい。

### 2 雀巢庵とその周辺

雀巢庵は、江戸時代後期の本草学者である。吉田高憲、通称平九郎(代々世襲)、幼名は世良太郎、字は字岳、号は雀巢庵また藪月と称した。1805(文化2)年、尾張藩士・吉田平九郎の長男として生まれ、父の没後馬廻組、のちに寄合組となり、禄は百石であった。住所は尾張広井三蔵であり、納屋橋南・堀川東岸にあった尾張藩の蔵の近くであった。広井三蔵は『尾張名所図会』(図1)からも分かるように人の行き来が盛んな場所であったと思われる。博物を好み、水谷豊文に師事して動植物を研究した。実際に彼の研究の拠り所は自然物であり、『虫譜』『魚譜』『介譜』『蜻蛉譜』をはじめとした自然物に関する名著を多く遺している。1859(安政6)年8月24日、当時流行したコレラに倒れ、54歳の若さで急逝した。墓所は雀巢庵が虫の霊を供養していたといわれる七寺<sup>ななつでら</sup><sup>(6)</sup>である。雀巢庵没翌年には同寺で雀巢庵追薦博物会が行われた。

彼が生きていた時代の尾張では、本草家たちが盛んに活動を行っていた。尾張本草学の名を高めたのは水谷豊文・伊藤圭介を中心とするグループ、嘗百社である。嘗百社は当初水谷豊文・石黒濟菴・伊藤瑞三・大窪太兵衛・大河内存真などが「七の日」に会合を開いていたものが、文政のころになると吉田雀

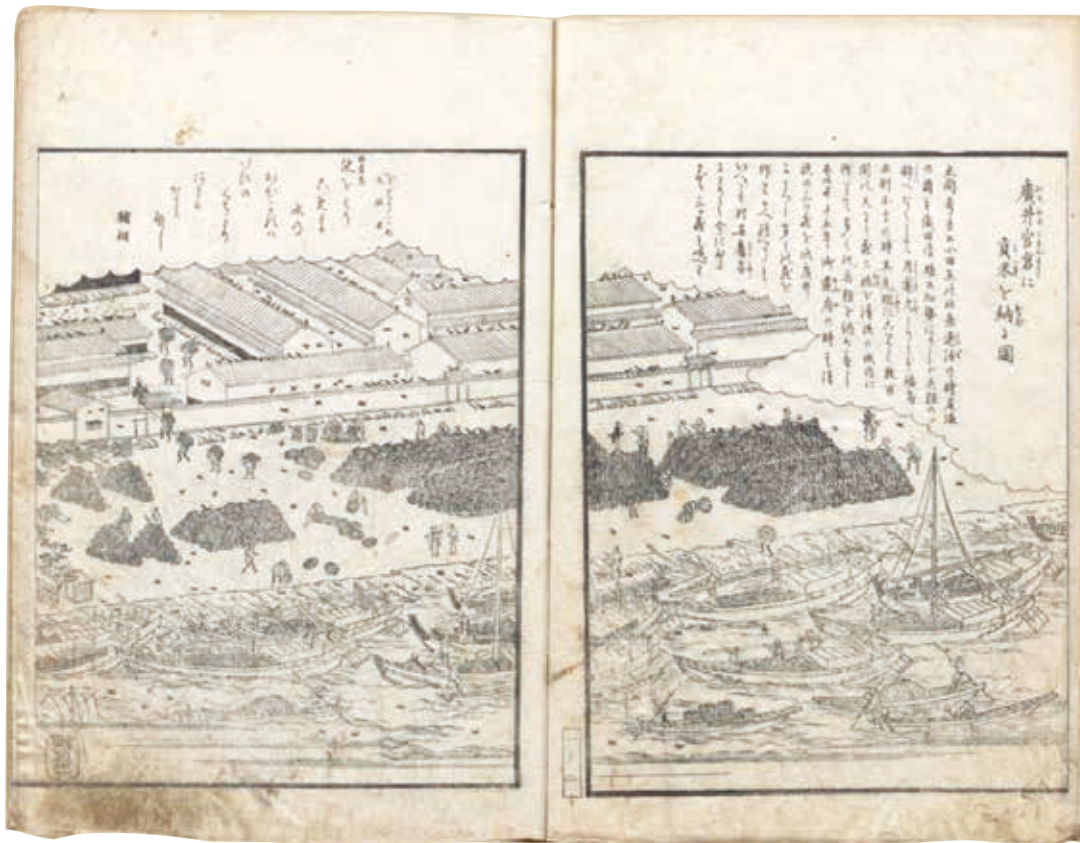


図1 『尾張名所図会』より広井三蔵の様子を描いたもの(愛知県図書館貴重本デジタルライブラリーより)

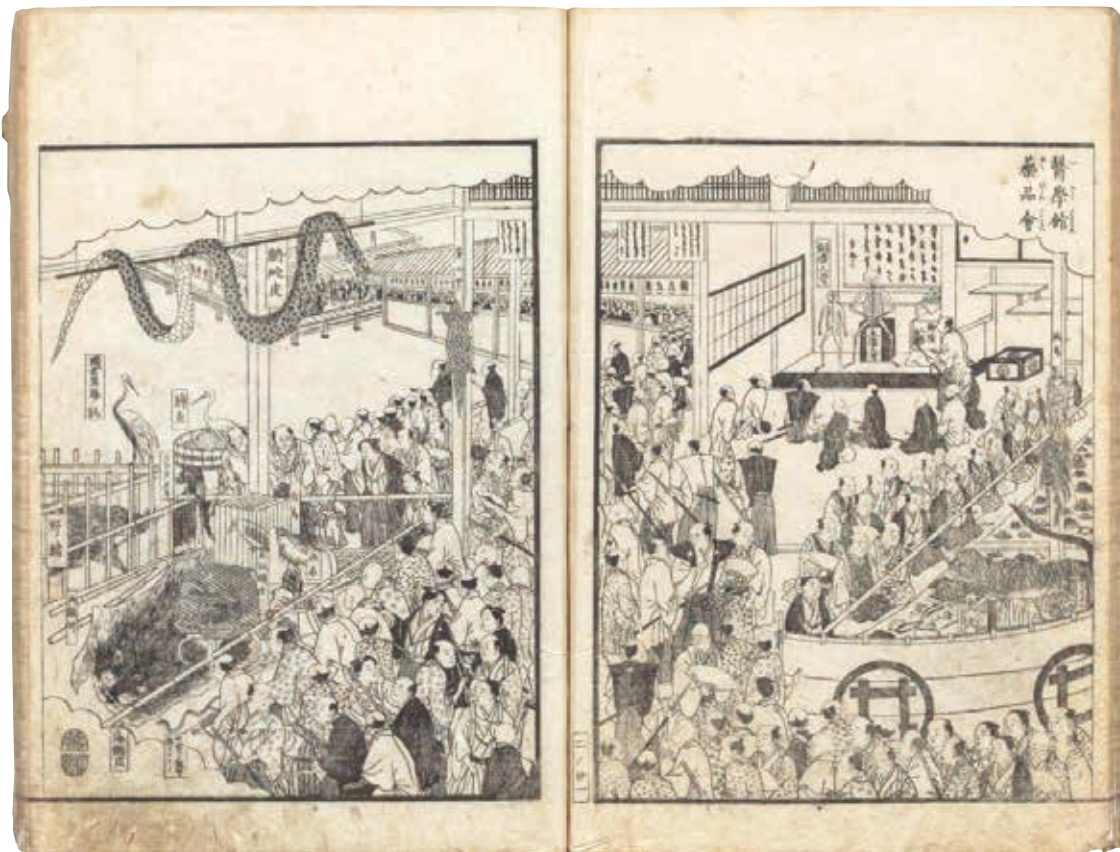


図2 『尾張名所図会』より「医学館薬品会」(愛知県図書館貴重本デジタルライブラリーより)



巢庵・大窪昌章・伊藤圭介・神谷三園らが加わり成立していったといわれる。嘗百社のなかでも伊藤圭介・水谷豊文・大河内存真らは、1826(文政9)年のシーボルトの江戸参府の際、熱田宿にて学術上の知識を交換した経験もあり(杉本勲『伊藤圭介』31頁人物叢書4 JapanKnowledge版<sup>(7)</sup>)、西洋の知識も取り込んでいたと考えられる。雀巢庵らが加わってからは本草会が行われるようになり、基本的に伊藤圭介の自宅や別邸で開催されていた。尾張では嘗百社の博物会以外に医学館というもう一つの学術グループが存在していた。医学館が開催した医学館薬品会は様々な土地からありとあらゆる珍しいモノを集め公開し、『尾張名所図会』にもその様子が描かれているほど(図2)大変多くの見物人で賑った。1833(天保4)年の医学館薬品会には嘗百社のメンバーから大河内存真・水谷義三郎・大窪舒三郎・吉田平九郎・伊藤圭介らが出品しており、双方の交流があったことがうかがえる。

### 3 雀巢庵博物会について

国立国会図書館蔵『尾張名古屋博物会目録』は、雀巢庵が個人的に開催した博物会「雀巢庵博物会」の目録である。1837(天保8)年から1859(安政6)年まで毎年1月25日に計20回<sup>(8)</sup>開催された。開催場所は彼の自宅で、1月25日を研究会、26日と27日を博物会として公開していた。出品された品は、舶来工芸品・薬草・鉱石・古器物・国札・書籍・動物・魚類・化石など多岐にわたった。なかでも、古器物は古瓦を主としてほぼ毎回出品されていた。なお、本稿における「古器物」とは、古瓦・勾玉・土器・石器・古鏡など近代的考古学の範疇で遺物と認められるものを指す。

#### 1) 国立国会図書館蔵『尾張名古屋博物会目録』について

この目録は写本で、全5冊である。すべての冊子に「伊藤篤太郎記」と押印されている(図3)。1冊目は第一回～第三回、2冊目は第四回～第七回、3冊目は第八回～第十一回、4冊目は第十二回～第十四回、5冊目は第十五回～第二十回の目録が写されて

いる。基本的には、各回の目録と出品物の図または拓本(写しカ)が一組になって構成されているが、第一回博物会は目録の本文のみ、第十九回博物会は図のみで構成されている。図の順番は目録の順番と必ずしも一致していない。

同様の史料は、雀巢庵博物会の目録を写した国立国会図書館蔵の写本『博物会目録』<sup>(9)</sup>が現存しているが、この史料は第十八回から二十回までの内容を欠いている。雀巢庵の遺著遺物等は散逸しているため(吉川 1951: 32頁)『尾張名古屋博物会目録』および『博物会目録』の原本となる目録の詳細は現在のところ分かっていない。

#### 2) 各回の概要

目録から読みとれる各回の概要について、以下にまとめる。なお、各回における総点数は目録に表記されている出品物の数であり、実際の出品数とは大幅に違っている可能性がある。

##### ・第一回 天保8(1837)年

煙管・扇・簪・その他舶来工芸品を中心に計101点出品されている。それぞれ、中華・西洋・琉球・蝦夷・カラフトのものであることが品名の右上に明記されている。図は付属していない。

##### ・第二回 天保9(1838)年

金物・小判・壺・古鏡・古瓦・不詳物・引札などを中心に計323点出品されている。製年や由来が品名の右上または隣に記されているものもある。図は計78点描かれており、小判や分金の図が12点、鏡の拓本を写したと思われる物が14点ある。勾玉・金環銀環の図も見られ、古器物への関心の高さがうかがえる。注目すべきは、銘帯連弧紋鏡と思われる図(図4)である。この図は原本の拓本を写したものと思われ、細部は書かれていない。しかし、角ばったゴシック体様の碑文・連弧紋などが佐賀県三津永田石蓋甕棺墓出土の銘帯連弧紋鏡(図5: 車崎編 2002: 56頁 図56-10)と類似している。同様の鏡は主に北部九州の甕棺から出土しており、最小の例で約5cm～最大でも約9cmと小さいことが特徴である。この図は約8.3cmの大きさと描かれているため、仮に原寸に近い大きさと書かれていた場合には大きさもほぼ



図3 『尾張名古屋博物館目録』第一巻表紙。「伊藤篤太郎記」の押印(右: 拡大図)がある。(国立国会図書館デジタルコレクションより)



図4 (左) 『尾張名古屋博物館目録』第一巻、第二回の図版より、銘帯連弧紋鏡の拓本を写し取ったと思われる図(S=1/2) (国立国会図書館デジタルコレクションより)

図5 (右) 佐賀県三津永田石蓋甕棺墓出土の漢鏡(S=1/2) (車崎正彦編『鏡』2002: 56頁, 図56-10)

一致する。

#### ・第三回 天保10(1839)年

古柀<sup>(10)</sup>・勾玉壺<sup>(11)</sup>・高麗狗・古経・人形など計175点が出品されている。中でも勾玉壺というものが有斐軒<sup>(12)</sup>から11点出品されている。勾玉壺とは、主として勾玉・管玉・白玉などを伴って出土した土器のことを指し、木内石亭『曲玉問答』にもその説明と図が記載されている。水谷は堀陶器という名称の品も出品していて、中には「江州野州郡三上山雌山ノ山石屋ヨリ出」と由来が書かれているものもあり興味深い。図は計37点あり、軒丸瓦の拓本や煙管などがみられる。

#### ・第四回 天保11(1840)年

石英・ほか鉱物類・笛・根付・動植物・古瓦・人形など計227点が出品されている。石英など鉱物類が出品物の約半数を占めている。また、水谷義三郎が雑品として計49点出品している。図は計12点あり、鏡や刀銭のようなものがみられる。

#### ・第五回 天保12(1841)年

化石・動植物・薬草・瓦など計199点出品されている。特に紫山堂は20点、水谷義三郎は21点、雀巢庵は27点、それぞれ化石・動物・貝や甲殻類など自然物を中心とした品を出品している。図においても、化石や動物の図が丁寧に描かれており、とりわけ極楽鳥については絵と共に解説が書かれている<sup>(13)</sup>。図は計32点で、軒丸瓦の拓本が数点みられる。

#### ・第六回 天保13(1842)年

古銭・人形・動植物・化石・虫など計177点が出品されている。伊藤圭介や、紫山堂、水谷義三郎、雀巢庵らが自然物を積極的に出品していたが、「加藤氏」という人物<sup>(14)</sup>が勾玉壺・古瓦、雀巢庵が勾玉をそれぞれ出品している。図は計23点あるが、この回に特徴的なのが熱田宮の古瓦を中心とした軒丸瓦や軒平瓦の拓本が約3分の1を占めていることである。目録だけを読む限りでは、古瓦の存在はそれほど目立たないために興味深い。

#### ・第七回 天保14(1843)年

出品数は91点と少なめで、鉱物・植物・薬草などが目立つ。古器物については古鏡が1点のみである。

図についても同様に計20点のうち植物や水晶などの図が目立つ。特に虫については非常に丁寧に描かれている。また、ほぼすべての図に名称や寸法が記載されている。

#### ・第八回 弘化元(1844)年

古器物・薬草・鉱物など計129点が出品されている。古器物は勾玉・管玉・白玉などである。図は計19点で、分金や嘉永通宝などの銭類・文鎮・煙管・貝などが描かれている。

#### ・第九回 弘化2(1845)年

枕・貝類・煙管・鉱物・古柀・植物・勾玉壺など計124点が出品されている。特に貝は様々な出品者から出品されており、図にも丁寧に描かれている。古器物に関しては「矢田村掘得タリ」と併記している勾玉壺や、古瀬戸の猪口があった。また、不詳器物という品が水谷義三郎や雀巢庵などから出品されている。どのような器物であったかは図に認められないため不明である。図は貝・古柀・柄鏡など計11点ある。

#### ・第十回 弘化3(1846)年

鉱物・化石・動植物・證文など計180点出品されている。この回では、出品物の中で自然物の割合が高い。紫山堂、浅井正賛から化石や珍しい鉱物が多数出品されている。また雀巢庵は鉱物や貝類、勾玉壺を出品しているが、目立っているのが鳥類の卵である。文鳥や鳩などの鳥類の卵を16点出品しており、これまでの博物会にない独特のラインナップとなっている。図にも魚や鳥が丁寧に模写されており、特に鳥の図は嘴に色を塗っている。これまでの図には着色はみられなかった。

#### ・第十一回 弘化4(1847)年

鉱物・貝類・魚類・昆虫類・植物・古柀など計243点が出品されている。雀巢庵も前年度と同様に自然物を中心に出品している。図も自然物・銭類・古柀など計22点あるが、その中でも顕微鏡のような図が1点あり興味深い。アイナメについては説明文も添えられている<sup>(15)</sup>。

#### ・第十二回 嘉永3(1850)年

古瓦・古文書・鉱物・動物・魚類など計179点が



出品されている。古文書は『古写経紙』、『続日本記紙』や『東大寺反故』など24点出品されていて、この回で一番目立つ。古器物に関しては、勾玉壺・古瓦などが数点みられる。雀巢庵は貝類などに加えてアヒル・コガモ・マガモなど鳥類も出品している。図は魚類、銭類、古瓦など計20点ある。クリノマユ<sup>(16)</sup>・ウズラ貝肉<sup>(17)</sup>・ラシクサエビ<sup>(18)</sup>・ウミねスミ<sup>(19)</sup>・サンシャウウホ<sup>(20)</sup>には説明文が伴う。注目すべきは「筑前裏粕屋郡薬王寺村 薬王寺古瓦」と記された古瓦の拓本(図6)である。この拓本は表裏採られており、「裏」側には布目も認められる。薬王寺とは現在福岡県古賀市にある薬王寺廃寺の可能性が高い。報告書によれば、薬王寺廃寺は9世紀前半から12世紀初頭に成立しており、発掘調査の際には多量の瓦が出土している。報告書に掲載されている平瓦には格子目の叩きが施されていることが特徴であったが、この図では特に表現されていない。また、上述した青柳種信が『筑前國統風土記拾遺』において、薬王寺村の項で「薬王寺址」として取り上げており(青柳種信著・福岡古文書を読む会校訂『筑前國統風土記拾遺(下)』1993年 文献出版: 158頁)、江戸時代には古瓦が出土することで有名だったようだ。筑前から尾張までの流通ルートや双方の本草家の学術的交流など気になる点も多いが、ここでは紹介だけに留めておきたい。

#### ・第十三回 嘉永4(1851)年

扇・カルタ・人形などの工芸品や、鉾物・薬草・魚類など計197点出品されている。古器物は、大窪安治から古鏡、古瓦、林から「古製ノ鍬」などが出品されている。図は計19点あり、器物は茶色く着色されている。図中に「三池住貞次」と書かれているカルタが描かれているが、最古の国産カルタと言われている天正カルタと特徴が一致しており、興味深い。そのほか、鳥や器物などが丁寧に模写され、柄鏡、軒丸瓦の拓本もある。

#### ・第十四回 嘉永5(1852)年

木像・煙管・絵図などの工芸品や、化石・鉾物・動物・魚類・貝類などの自然物、古瓦などの古器物計134点出品されている。図は計24点ある。出品

物に特徴はないが、図は約半数が煙管で成り立っている。装飾部分まで丁寧に描かれており、関心の高さが伺える。他にも、軒丸瓦や鏡の図もある。その中でも内行花文鏡の図(図7)に関して検討したい。国内で出土している鏡の中から、この図に描かれている内行花文鏡と類似する例を探すと、奈良県のマエ塚古墳出土の内行花文鏡(図8: 車崎編 2002: 234頁 図234-2)が挙げられる。こちらも、図4同様に細部まで描かれていないため明細な検討はできないが、模様の特徴がところどころ一致している。約17cmの大きさで描かれており、原寸に近い大きさで描かれていた場合には、マエ塚古墳出土の鏡(17.6cm)と大きさもほぼ一致する。

#### ・第十五回 嘉永6(1853)年

絵図・写本・人形などの工芸品や、鉾物・貝類・魚類などの自然物、古瓦などの古器物計215点出品されている。注目すべきは、「加藤氏」から、東大寺・国分寺・熱田宮をはじめとした古瓦が多数出品されていることだ。名古屋周辺だけでなく京都や奈良の寺の古瓦も多い。図は計48点あるが、そのうち36点が古瓦の拓本である。軒丸瓦や軒平瓦などの特徴面をうまく捉えるように拓本が取っており、関心の高さがうかがえる。また、銅鐸のような形をした器物も1点図化されており、興味深い。

#### ・第十六回 嘉永7(1854)年

絵図や面などの工芸品、鉾物など計49点出品されている。古器物に関しては、雀巢庵から雷斧が1点出品されている。雷斧とは石斧のことであり、石器などの遺物が人工のものとして捉えられていない時代の呼称である。石器・石斧・石棒などの遺物は、早い時代から発見されており、古くは『続日本後紀卷八』に記録されている。それらの遺物は雷雨などの際に発見されたことから天から降ってきたものと捉えられ、その神秘的な捉え方は江戸時代までながく伝承されてきた。また、種杏園<sup>(21)</sup>が土製の勾玉・管玉・白玉を出品している。図は計8点あるが、うち6点は古枅を描いたものである。

#### ・第十七回 安政3(1856)年

虫や魚介類・大根・鉾物などの自然物、写本や春



図6 『尾張名古屋博覧会目録』第四卷、第十二回の図版より、四王寺古瓦と題された図(S=1/1)(国立国会図書館デジタルコレクションより)



図7(左) 『尾張名古屋博覧会目録』第四卷、第十四回の図版より、内行花文鏡を写し取ったと思われる図(S=1/4)(国立国会図書館デジタルコレクションより)  
図8(右) 奈良県マエ塚古墳出土の内行花文鏡(S=1/4)(車崎正彦編『鏡』2002: 234頁, 図234-2)

画など計75点出品されている。この回ではアメリカの噛み煙草や、ロシアの旗印・刀など、これまでに出品されていなかった国からの舶来品が出品されていて、正式に通商が開始される安政5(1858)年以前からアメリカやロシアの工芸品が流通していたことがうかがえる。図は壺や平戸焼の陶器が中心で、寸法が併記されている。また、兵糧銭には説明<sup>(22)</sup>が併記されている。

#### ・第十八回 安政4(1857)年

鉱物・貝類・魚類などの自然物や、藩札・枡・人形などの工芸品計63点が出品されている。国札は、岡山・福山・松山・徳島など現在の中国・四国地方を主としている。図は計10点あり、人形や鉱物・小銭などである。

#### ・第十九回 安政5(1858)年

この回には本文がなく図のみであるため、総出品数は不明である。図は計14点あり、「奇物」と称した人形のようなものには説明文<sup>(23)</sup>が併記されている。そのほか、清の煙管や枡などが描かれている。

#### ・第二十回 安政6(1859)年

春画や絵図・羽子板などの工芸品、鉱物・動物などの自然物計76点が出品されている。図は計12点あり、それぞれの図に品名が併記されている。古い鈴や朱塗りの器など丁寧に描かれている。中には蝦夷製の「トンコロリン」という楽器が描かれているが、これはアイヌ民族の間で演奏される「トンコリ」という楽器であると思われる。また、陽石も1点描かれている。

### 3)『尾張名古屋博物館目録』全体を通して

第一回から第三回までは舶来品の工芸品や古器物が中心であり、自然物の割合は低かった。しかし、第四回からは毎回3分の1～半数程度を自然物が占めるようになる。鉱物・漢方薬の原料となる薬草・虫・貝・魚・鳥など、出品物の種類は多岐に渡った。古器物に限定すれば、一番多かったものは古瓦である。雀巢庵邸からほど近い熱田宮のものから、奈良・京都・さらには筑前のものまで、西日本を中心として収集され、博物館に出品されていた。また、ほとんどの瓦は拓本が取られているようだ。

拓本はしっかりと特徴を捉えた取り方をされていて、技術だけでなく関心の高さもうかがえる。古瓦以外で言えば、勾玉壺などの土器・図4に挙げた銘帯連弧紋鏡などの鏡・勾玉・石器も頻出していた。以上の古器物は出土地や由来・出土状況を伴っているものが多く、目録からも関心の高さや古器物へのこだわりが伺える。彼らにとって珍しいモノはなんでも議論の対象であっただろうが、目録を通して見みると、古器物に重点が置かれていたと示唆されるところがたびたび見受けられるのである。

## 4. おわりに

雀巢庵博物館において注目すべきは、やはりほぼすべての回に古瓦・土器・古鏡をはじめとした古器物が出品されていることである。雀巢庵とその周りの本草家たちが集まる博物館で、毎年古器物を持ち寄り、多くの拓本や図を後世に遺した。全体を通して見ると必ずしも古器物だけに重点が置かれていた訳ではないが、他の博物館・本草会などと比較すれば明白な特質を持っていることがわかる。この博物館の主催者である雀巢庵は、上述のように自然科学分野の先駆者として著名であるが、好古家としての一面も注目されるべきである。つまりこのような博物館を主催し、遺物の拓本を遺した雀巢庵はまさに考古学の先駆者の一人と評価できる。

この博物館に関しては、出品物の入手過程、例えば第十二回で出品されていた薬王寺古瓦の入手ルートや、背景にある出品者の詳細—例えば第十五回で奈良や京都の寺の古瓦を持ち寄っていた「加藤氏」の詳細など、大いに検討の余地がある。また、雀巢庵の遺著・遺品が散逸している事実もあり、未発見の史料が存在する可能性も否定できない。

雀巢庵のような好古家たちは、ただひたすら「モノ」に情熱を注ぎ、考察し、議論し、それらを後世に遺していった。彼らの「モノ」への解釈は、現代の視点からすれば間違いや稚拙な面も多いが、現在考古学を学ぶ我々が見習うべき姿勢も多い。また、このような好古家を含めた博物学者たちの活動が基盤となって明治時代以降の古器旧物保存・博物館創設



などが成り立っていった歴史を顧みれば、彼らは博物館活動の基礎を創り上げた人々とも評価できる。今後、雀巢庵および他の近世の学者たちの好古家の一面がよりいっそう明らかになることを期待したい。

## 謝辞

本稿は、西南学院大学国際文化学部国際文化学科教授宮崎克則先生の御指導のもと執筆した卒業論文を基盤にしている。史料を解釈するにあたって多大な助言と丁寧なご指導をいただいた宮崎先生に深謝の意を表す。

また、考古学的分野の解釈については、西南学院大学国際文化学部国際文化学科准教授伊藤慎二先生にご指導いただいた。ここに深謝の意を表す。

最後に、投稿の機会を与えてくださった西南学院大学博物館学芸員下園知弥先生に感謝の意を表す。

## 主要参考文献 / 画像引用元(著者名昇順)

- 磯野直秀「薬品会・物産会年表(増訂版)」- 慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会『慶応義塾大学日吉紀要. 自然科学』No.29 55-65頁 2001
- 磯野直秀・田中誠「尾張の嘗百社とその周辺」- 慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会、『慶応義塾大学日吉紀要. 自然科学』No.47 15-39頁 2010
- 車崎正彦編『鏡 考古資料大観 5 弥生・古墳時代』小学館 2002
- 齊藤忠『日本考古学史』吉川弘文館 1974
- 吉川芳秋「日本昆蟲學の大先駆者 尾張本草家、雀巢庵 吉田平九郎」- 日本科学史学会『科学史研究』通号19号 26-33頁 1951
- 愛知県図書館貴重和本デジタルライブラリー『尾張名所図会』  
<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/detail/94.html>
- 国立国会図書館デジタルライブラリー『尾張名古屋博物会目録 20巻』  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2558464?tocOpened=1>

## 註

- (1) エドワード・シルヴェスター・モース(Edward Sylvester Morse) - 1838(天保9)年アメリカ合衆国メイン州ポートランドに生まれる。1877(明治10)年に東京大学理学部教授に任命される。大森貝塚の発見以外にも、日本に初めて進化論を紹介し、動物学、人類学、考古学の発展に業績を残した人物として知られている。1925(大正14)年没(椎名仙卓著『モースの発掘: 日本に魅せられたナチュラリスト』1988)。

- (2) 概説的研究書として、森浩一編『考古学の先覚者たち』1988 中央公論社、斎藤忠著『郷土の好古家・考古学者たち 東日本編』2000 雄山閣、同著『郷土の好古家・考古学者たち 西日本編』2000 雄山閣、國學院大學日本文化研究所編『近世の好古家たち—光圀・君平・貞幹・種信—』2008 雄山閣などが挙げられる。
- (3) 青柳種信 - 1766(明和3)年福岡城下地行六番町に生まれる。身分は足軽六石三人扶持鉄砲組の先手。通称は勝次、号は柳園。24歳の時本居宣長の弟子になり、国学に励む。29歳で沖ノ島御番を命ぜられ日録として『瀛津島防人日記』を著す。1812(文化9)年には伊能忠敬による九州地理測定の案内役となる。1814(文化11)年49歳の時に御右筆記録方に進められ、晩年は『統風土記附録』の再吟味や『柳園古器略考』などを著したことで、筑前の国学に大きく貢献した人物と知られる。1835(天保6)年没(福岡市立歴史資料館編『国学者青柳種信: 筑前考古学のくさわけ』福岡市立歴史資料館 1979)。
- (4) 現福岡県糸島市三雲
- (5) 県教育委員会による1975年の発掘調査において、文政5年の発掘調査で取り残されていた遺物が見つかり、図版と接合可能な鏡の破片もあったという(福岡市立歴史資料館編 前掲同 1979)。
- (6) 七寺の現所在地は愛知県名古屋市中区大須2丁目28-5で、開発のため墓は全て八事霊園(同市天白区八事山117)に移されている。
- (7) <https://japanknowledge.com> : 参照 2019-12-26
- (8) 嘉永元・2年と安政2年は記録がないため行われていないと考えられている。
- (9) この写本には「白井氏蔵書」という印が押されている。
- (10) 原文ママは「古升」。以下同。
- (11) 曲玉壺とも記されているが、ここでは勾玉壺で統一する。
- (12) 有斐軒は水谷豊文の号であるが、1833年に没している。
- (13) 「練鵲 和名フウテウ パラデイスホウケル蘭語 ハラデイスハ極楽ト云事 ハウケルハ鳥ト云事也 阿武保舞蛮多阿兩州ノ産也 樹木ニ宿りて微シ大虚ヲ飛行シ以風為食由依て人力ニ捕ル事難及老鳥降ルヲ捕ル申也 惣毛色有光沢如真綿至て精浄鳥ニテ説極楽鳥ト云 従頭至尾二尺程容姿正写ノ図ト認アル 文化三丙寅年和蘭船積渡ス 柴田氏蔵」
- (14) この人物に関する詳細は不明。
- (15) 「ヲコゼアイナメ 大サ如図惣身赤黒色紫点アリ 頭ヲコゼノ如シ半ハアイナメノ如シ故ニ名ヅク」
- (16) 「蝸ハ黒色・メ尻ニ至テ紫黒色頭ニ針ノ如キモノアリ」
- (17) 「味石決明如キ・シテ淡シ アワヒノ如キ貝」
- (18) 「一名鎌倉エビ 北海道多クアリ味美也」
- (19) 「知多長浦方言ヨツテ 大サ如図全身白色細キ毛アリ光アリ大文字貝ニ似テ至テヨホキ貝也」
- (20) 「尋常ノモノハ班ナシ此品ハ黒班アリテ美也」
- (21) 詳細不明。銀杏園(=吉田政九郎)の誤植か
- (22) 兵糧錢 一日ニ三錢ヲ食スレハ空腸セサル事ナシト云
- (23) 「三州池鯉鮒明神主永井□□使国助といふ者江戸品川トウ泉寺門前通行之節此奇物を拾ひ是ハ嘉永亥年六七月頃水野大監物異国船渡来ニ付御台場見分として罷越され候節也 右国助ハ御用閑役勤候節此奇物ヲ拾ふ也 江戸ニテ諸方へ見せ候処奇物説区々ニテ一定せず奇物の袋も共拾也 之西学者之考正ヲ俟之爾 安政二卯年十一月第五カ奇物物主国助之物語俣を記す者也 禪友居蔵」

鬼束 芽依(おにつか めい)

西南学院大学博物館学芸調査員

